



# 近江への道・大和への道

司馬遼太郎生誕 100 年

そして古代史への道

中村 元

2023 年 5 月 16 日

- (1) 近江への道
- (2) 大和への道
- (3) 司馬遼太郎の世界・この国のかたち
- (4) 古代史についての考察
- (5) 司馬遼太郎の世界と 2 2 世紀への道筋

## 始めに

司馬遼太郎さんの生誕100年になる今年2023年、司馬さんが歩いた近江の道（湖西のみち）と大和の道（山の辺の道—竹内街道）を散策してみようと考えた。

司馬遼太郎は、小説家であり「坂の上の雲」や「竜馬がゆく」などの「大衆小説」を書き、『街道を行く』シリーズでは、国内外の文化や文明をグローバルな視点で歩いて書かれた「紀行家」であり日本の古代、中世、近代史を俯瞰する「歴史家」でもある。

今回、『街道を行く』で司馬さんが歩いた「近江の道」と「大和の道」を散歩してみようと考えた訳は、「文明や文化について考えたりするロマンの世界を現地にてそれを見て楽しんだ」とする司馬さんのスタイルに大変共感を覚えたからである。

滋賀県散策では、私がお世話になった伊藤忠商事、近江商人の話題にも触れ、奈良県散策では、「古史の深層やロマン」「万葉の社会」等日本の歴史や文化「日本人のルーツ」そして「この国のかたち」の話題にも触れてゆきたい。

私が観て、感じた事を文中の<一言主のコメント>として紹介します。

### (1) 近江への道・司馬遼太郎『街道を行く 1 湖西の道、2 4 近江散歩』

<私の歩いた日程>

2023年4月20日（木）～21日（金）琵琶湖周遊の旅

京都駅—白鬚神社—高島メタセコイア並木—海津大崎（桜）—賤ヶ岳古戦場  
長浜（黒かべ square/水鳥公園/長浜城）—彦根（彦根城/玄宮楽々園）—近江八幡（伊藤忠記念館）—湖東さざなみ街道—京都駅



#### ① 司馬さんの歩いた「湖西のみち1」概要（大津—高島—朽木）

楽浪の志賀（新羅と楽浪）、白鬚神社（近江最古の神社）、湖西の安曇人（北九州ルーツの海人グループ）、朽木谷（信長の退却戦）。司馬さんは近江路に残る戦国武将の野心が好きだったらしい。（信長・秀吉・家康）  
継体天皇（26代天皇）は、近江あるいは越（福井）のゆかりの人でもあり

楽浪、志賀、白髭、安住、安曇の名前は大陸や半島との関係を示唆している。『街道を行く』第2巻では、「韓のくに紀行」を書いて加羅、新羅、百済の旅を書き、古代より『韓』と『倭』が分かちがたく交わってきた事を確認する旅であったと書いている。

- ② 司馬さんの「近江散歩24」では湖東の近江八幡、彦根城、安土城を紹介。彦根城は世界文化遺産になっている名城。井伊直政が関ヶ原の戦いの論功で家康より拝領、18年かけて築城された。私も国宝である天守閣に上り、琵琶湖を眺め「国名勝玄宮楽々園」からは彦根城を見上げる絶景を楽しんだ。

浅井長政の小谷城も湖北にあり、長浜は豊臣秀吉が初めて作った城下町であり、秀吉が復興した長浜八幡宮も豊国神社もある。賤ヶ岳や姉川古戦場もあり湖東・湖北は戦国歴史を刻んだ街がある。

- ③ 近江八幡 近江商人伊藤忠の創業者、伊藤忠兵衛誕生地（犬神郡豊郷村）の伊藤忠商事の創業者である伊藤忠兵衛氏の生家（伊藤忠記念館）を訪問。近江八幡の近くの湖東は多くの近江商人が活躍した地でもある。この地は「伊藤忠」の原点で、書籍「伊藤忠」ダイヤモンド社 野地秩嘉にて、伊藤忠の歴史が紹介されている。

伊藤忠は165年前に繊維の商売を、犬神郡で近江綿布の卸売りで始めた。近江に本拠をおき客先の要望・マーケットの業態を基本に行商した近江商人には【三方よし】を生んだ不変の営業スタイル・宗教的土壌があった。

伊藤忠二代目が英国で学んだ事を実践したように、現在の伊藤忠岡藤 CEO の経営は、グローバルに商売を進めて、あらゆる産業セクターとも関連し、発想力と行動力で会社を引っ張っていった伊藤忠兵衛に共通するものがある。  
<湖東の近江八幡、彦根城、安土城は「近江散歩24」にても紹介>

- ④ 「近江散歩」司馬遼太郎は、『街道を行く』の1巻で近江を訪問して、再度24巻で近江を訪問している。司馬さんの思い出がある土地である。

<司馬遼太郎近江散歩で歩いた道>

近江の人（近江門徒・蒲生郡日野町）、近江商人（日野商人と八幡商人）芭蕉「行春を近江の人とおしみける」「四方より花咲き入れし鳩の湖」と詠んだ芭蕉は近江が好きで「奥の細道」の旅を終え大津に2年程滞在した。

寝物語の里（中山道）、彦根へ（彦根城）、関ヶ原（井伊直政）、金阿弥、浅井長政の記（姉川古戦場）、伊吹山（北近江の名山）、姉川の岸（一級河川）、近江衆（朝倉・徳川の参戦）、国友鍛冶（鉄砲鍛冶）、安土城跡と琵琶湖（信長の城、琵琶湖総合開発）、ケケス（ヨシキリー鳥ーヨシの湖畔）、浜の真砂（近江八幡ー入島、水鳥）

芭蕉をもう一句「旅に病で 夢は枯野を かけめぐる」芭蕉の絶句である。

<一言主のコメント>

滋賀県は琵琶湖の水で生きている。

滋賀県は森林もあり、水田もあり「美味しいコメや酒・近江牛」もある。

鳩（ニオ）の湖は琵琶湖の別称、ヨシやアシは水辺の魚や鳥の休息地。古代



には「水運」そして陸の5街道で交通の要衝となった場所でもある。  
敦賀まで一時間との事で新鮮な魚も手に入るらしい。美しい山並みや水辺もあり、絵になる場所でもある。芭蕉や司馬が来た近江の行く春を楽しめた。

## (2) 大和への道・司馬遼太郎『街道を行く1 湖西の道& 2 4 奈良散歩』

<私の歩いた行程>

5月12日(金) 司馬遼太郎記念館(東大阪市) - 東大寺 - 三輪山 - 山の辺の道 - 大神神社(おおみわじんじゃ)

5月13日(土) 二上山(にじょうざん) - 當麻寺(たいまでら) - 竹内街道 - 太子歴史博物館 - 葛城山麓(一言主神社) - 藤原京跡(天野香具山) - 橿原神宮 - 新大阪



<司馬遼太郎の歩いた道>

- ① 竹内街道、大和石上、布留の里、三輪山(神が宿る山・信仰の対象・大物主・大神神社)、葛城山、纏向遺跡(前方後円墳・卑弥呼の墓?)、奈良盆地と山々(三輪山・二上山・葛城山・生駒山・大和三山)、一言主神社 - 竹内越え(司馬遼太郎の母親の実家 - 竹内)

<一言主のコメント>

奈良県は盆地に出来た都と緑に囲まれた美しい山々で紡いだ1300年以上の変わらない魅力の歴史物語である。

一言主神社は、奈良県御所市にある神社、一言主は「良いことも悪いことも一言で言い放つ神」で「一言だけの願い」は聞いてくれる神であるそうだ。私のコメントは<一言主のコメント>として、本レポートに登場させた。

- ② 奈良散歩(街道を行く24)では東大寺、二月堂、五重塔、三輪山、石上神宮・山の辺の道を(奈良盆地東)、葛城の道(奈良盆地西)を歩いた。

<一言主のコメント>

奈良県も嘗ては、大きな湖であったようだ。奈良盆地がすっぽり入る広さであったのだろうか? 地政学のロマンでもある。

三輪山から始まった神道、奈良時代から平安時代に広がった仏教世界。政治も宗教も「奈良」から新しい時代になってきた。すべては神が鎮まる聖なる山三輪山から始まり天然の要塞である奈良盆地に豪族がひしめいた。司馬さんも新聞記者として京都・奈良の寺社を巡り、歴史や宗教の世界に入った。

- ③ 飛鳥時代 飛鳥京（593－694年 推古天皇 水の都・仏教文化）  
近江遷都（667年、天智天皇、唐に対する防衛目的）  
藤原京（694－710年 持統天皇・仏教文化）  
奈良時代 平城京（710年～元明天皇・天平文化 東大寺大仏、飛鳥寺、法隆寺、薬師寺、興福寺 政治と宗教、権力闘争）

<大和を囲む山々>

葛城山（豪族葛城氏、製鐵技術）・二上山（1500万年前に大爆発、凝灰岩の産地—サヌカイト武器の原料、古墳）・天の香具山（百人一首万葉集で有名152m、藤原京を囲む大和三山）三輪山（神の山）

- ④ 歴史上の登場人物、聖徳太子（厩戸皇子）、推古天皇、舒明天皇、聖武天皇、天智天皇、天武天皇、持統天皇、元明天皇、神武天皇（初代）藤原氏（鎌足・不比等）・蘇我氏〈開明主義・製鉄技術〉物部氏(神仏論争)、渡来人（秦氏・漢氏）遣唐使（空海・阿倍仲麻呂・山上憶良・吉備真備）

<一言主のコメント>

藤原不比等と空海は、奈良・平安時代に、日本の生んだ二人の天才。藤原不比等は政治家、持統天皇に仕え、大宝律令や日本書記の編纂をした。（659－720）日本国の形を作った偉大なプランナー。一方で、天皇家との関係において、「従」の関係を貫き平安な時代を構築し藤原家の繁栄を実現した。（藤は、つる性植物、他の木にからみあう）

空海は、平安初期の僧、遣唐使で唐の密教を勉強し、帰国後、真言宗を開き古代の宗教世界を変えた。嵯峨天皇の信頼も厚く、仏教、神道を超えた。

密教で、同時期に遣唐使となった最澄とその後の仏教界に影響を与えた。密教だけでなく唐で学んだ思想、実学で土木工事や教育も広げ、空海の世界である高野山を開き、「知恵と行」の超人であった。（774-835）幅広い分野で才能のあるスーパーマン。書の達人で、ひらがなを作ったともいわれている。

### (3) 古代史にける重要な考察ポイント（近江・大和）

#### ①地政学・水路・古代道路・東アジア・ユーラシア・民族移動

##### 1. 地政学

地形から見れば滋賀県の6分の1は琵琶湖、奈良県面積の8分の1は盆地である。畿内といわれ、水で繋がる大阪、京都、中部への交通の要衝である。地政学的特徴を生かして、政治、経済、文化の中心となった。

##### 2. 古代の水路

滋賀県は、福井県に琵琶湖（湖上路）で繋がり日本海へのアクセスが容易。奈良県は竹内街道や京都経由で、大阪の堺につながる。古代では木材を滋賀から（琵琶湖経由）川を利用して運んだ。大阪湾には宇治川・淀川等を上手く利用して海路に繋がり、両県とも水を利用出来る地形（水路）があった。更には、瀬戸内海を通じて九州や朝鮮半島、中国大陸へと繋がる。

### 3. 古代の陸路

710年に出来た平城京は、僧の「行基」が、平城京への道や橋を作った。社会事業家「行基」のお陰で大和へ入る街道・橋や宿泊設備も出来た。建設資材は淀川・木津川・大和川利用で東大寺の大仏は752年の建立。交通網整理で、租税としての「物」が全国から集まった。

物や人の移動は、「行基」の道路や宿屋のお陰、街作りや街路樹は遣唐使の派遣された長安の都の見聞が生かされた。古代の陸路は、天武天皇時代に地方支配のハードウェアとして作られたという説もある。

#### <一言主のコメント>

水路の利用で古代国家は発展し、近江京・平城京・平安京と日本の国家群を構成した。信仰の世界も神道の神社や仏教の寺院が出来たため広がり、竹内街道は我が国最古の国道（613年）で、飛鳥と難波津を結ぶ重要な道。律令国家が始めた古代の道路網が今でも日本の7街道・鉄道の中心にある。

### 4. 万葉の旅（万葉集作品を通して、歌人の心、万葉の情景を楽しむ）

奈良時代の旅は、万葉集の旅でもあり、万葉集にも旅の歌が良く出てくる。万葉集は現存最古の歌集である。舒明天皇（629年—641年）時代から大伴家持、柿本人麻呂、大伴旅人、山上憶良などが編集に関わったようだ。

◎春すぎて 夏来るらし しろたえの 衣干したり 天の香具山  
（持統天皇—万葉集の頂点の時代）

◎秋の田の かりほの庵の 苔をあらみ わが衣手は 露にぬれつつ  
（天智天皇、第38代天皇、大化の改新を断行）

◎ももづたふ 磐余の池に なく鴨を 今日のみ見てや 雲がくりなむ  
（大津皇子—天武天皇の三男）

◎あおによし 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり  
（小野劣-平城遷都の歌、奈良は唐の長安を模して作られた）

◎あまのはら ふりさけみれば 春日なる 三笠のやまに いでし月かも  
（阿部仲麻呂—遣唐使として35年間、唐の長安にて、望郷の歌）

◎あわ雪の ほどろほどろに 降りしけば 奈良の都し 思ほゆるかも  
（大伴旅人—大伴家持の父、大宰府長官、望郷の歌）

◎楽浪の 志賀の唐崎 幸くあれど 大宮人の 船待ちかねつ  
（柿本人麻呂—近江の荒都、大津の宮は壬申の乱で焼滅）

古事記では「やまとは くにのまほろば たたなづく 青がき 山ごもめる 大和し うるわし」倭建命の歌として紹介している。

<一言主のコメント>

最近、若者中心に、短歌や俳句の人気があるようです。万葉集の相聞と挽歌。戦いの中で人の死を悼み、人を愛するという。望郷と自然。離れた地で思う故郷、雄大な自然への畏怖。「言霊の世界」として死の鎮魂と天皇の賛歌である万葉集。上記の中で私は大伴旅人と小野劣の歌が好きである。

一方で「倭は国のまほろば」と詠まれた歌と絶景の「万葉の世界」もある。「大和は国の中で一番良い所である」大和朝廷が三輪の地にあった4～5世紀頃の話である。確かに今でも三輪山は厳かで美しい山、二上山も良かった余談だが、近江も美しい森と湖で「国のまほろば」と呼んでも良いと思う。

#### 5. 遣唐使の旅（630－894）

遣唐使の旅（630年～894年）も大和から難波津・敦賀経由で唐の長安への旅であった。万葉集の歌人山上憶良も第七次遣唐使である。海外留学生は、唐の政治経済、仏教を学ぶ目的があった。天皇家は国家発展のため仏教を利用した。律令制も取り入れた。唐はシルクロードとつながる国で、ユーラシアの文化も通った道であった。最澄と空海は、命がけの遣唐使の中でスムーズに往復出来幸運であった。阿倍仲麻呂のように帰国できなかった不運な人もいた。

<一言主のコメント>

空海の言葉「虚往実帰」。空海は密教を持ち帰った。インド思想と中国思想を綯い交ぜた「空海信仰」は神道（道教）も仏教も合わせ持ち、平安以降も鎌倉仏教など日本の宗教界に影響をあたえている。「国恩に酬い奉らんがために本朝に還帰す」と空海は言葉を残している。密教だけでなく、「唐の文化」政治体制なども勉強し持ち帰った。司馬遼太郎も「空海の風景」を書いて空海の人物を限りなく評価している。日本を東アジアだけでなく、ヘレニズム文化、シルクロード、ユーラシア大陸と結び、グローバルに外国文化を受け入れるきっかけになった。

#### (4) 古代史についての考察

信仰・神統・天皇家・正当性・DNA

##### 1. 信仰

三輪山信仰が日本人の信仰の原点にあり、広く山岳信仰につながっている。三輪山そのものが、大物主大神のご神体山である。二上山は、古代の難波の港と飛鳥を結ぶルートにあった。太子町には神々と聖徳太子の御廟がある。日本最古の竹内街道の傍らに立ち、旅人たちの道標だった。天皇家の体系では二上山は大津の皇子が埋葬された霊山でもある。上山春平氏の『神々の体系』においては、古事記・日本書紀の比較において天皇制の起源などの政治的背景などが書かれている。



### <一言主のコメント>

三輪山は神代も今も神の山。祭神は出雲の神。太子につながる二上山。竹内街道は推古天皇、厩戸皇子の時代から利用された最古の街道。そして天才空海の世界につながった道。

山と森と岩は神につながる御神体。（三輪山・二上山・磐座・巨樹）

### 2. 神統

古事記の神統譜によると、出発点のイザナギ・イザナミとアマテラス・スサノヲが「高天の原」と「根の国」に両極分解した経緯が説明されている一方、大国主が自らの魂を大物主大神名で三輪山に鎮めた事が記紀に記されている。第十代天皇の崇神天皇が三輪山の麓に都をおかれた。

上山春平氏の「神々の体系」に、大和の豪族や天皇家、藤原不比等の関与などが書かれている。

### <一言主のコメント>

上山春平の「神々の系譜」は、神話と大和朝廷と藤原の系譜を書き、「大化の改新は神祇革命」とし不比等を「埋もれた巨象」と表現している。藤原不比等は平城京遷都、大宝律令、日本書紀で「天皇制」「国造り」で持統天皇と組んで藤原ダイナスティー（天皇家との共存）をデザイン。

大和と出雲の関係も面白い。「古代出雲」は大和政権への隷属とし、「大和と出雲」を「政治と祭祀」で分けた。三輪山は出雲の神様で盤座信仰がある、島根の仏経山は、奈良の三輪山に比定され繋がりを想像できる。歴史家の上田正昭氏は、出雲から大和を見る視点も大事だと指摘している。

### 3. 天皇家、正統性（レディティマシー）

天皇制の正統性（万世一系）は朝鮮半島、新羅や百済の渡来人との関係、天皇家と藤原家や豪族との関係、古墳や陵墓の特定等疑問が残されている。

古代天皇は武力もあったが、武士政権が出来上がって権威が弱体化した。奈良は大和朝廷の出発点として興味深い。滋賀は白鬚神社、継体天皇など古代の近江と北陸そして「半島と奈良」の繋がる場所として興味深い。

「倭」の国の卑弥呼と「大和」の国の天皇との繋がりは確認できない。古事記や出雲風土記での出雲や吉備の扱い、邪馬台国の場所（奈良であろうがなかろうが）や、魏の国と卑弥呼と関係は依然として謎である。日本書紀で天皇制・日本が確立された。鎌倉時代から江戸時代までの武士政権、そして明治時代以降の司馬の描く天皇制がある（皇国史観・統帥権）第二次世界大戦後は、平和憲法の下に「象徴天皇」が続いている。

### <一言主のコメント>

同一人種の共同体が、古代に成立した「天皇制」を核として国家を維持してきた。天皇の背後には、日本の神々が存在する。自然と神と人間。これが日本人の平和の意識・国のかたちを作ってきた。天皇家、宗教家、貴族、政治家、軍人、平民、そして古代中国文明（渡来人含め）や、近代の西欧文明、そして戦後のアメリカ物質文明を上手く受け入れている民族である。



東洋と西洋を上手く絡み合わせて作った国家が日本である。

#### 4. DNA・日本人のルーツ

DNA 的には、日本人は、モンゴル系、中国華南系に類似しているようで、どちらもルーツとすべきである。その源流、時代背景を知るには、近江・大和の国へと渡来した民族、東アジアやユーラシアの歴史と合わせて、深層を見極める必要がある。温暖化により照葉樹林文化になった日本。

コメ（稲作）に関しては中国南部がルーツとみるべきである。モンゴロイドとの同質性からは北方と南方のルートの倭人が日本人のルーツであるとされる。中国南方民族の移動のルートと中国北方系民族と朝鮮半島からのルートが日本人のルーツであると DNA 的にも証明されている。

<一言主のコメント>

モンゴル人や韓国人には、本当に日本人に似ている人が多い。日本の文化は中国とアメリカを抜きには語れない。米中が喧嘩している。

古代史の深層・・・文化、哲学、宗教、文明（ギリシャ、インド、中国）

古代史の深層・・・民族移動、気候変動、病原菌、戦争（その対策と科学）

東アジア文化（鉄、武器、コメ、漢字、言語、宗教）吸収・利用。

西欧文化（車、飛行機、肉、英語、IT, AI）の吸収・利用。

科学技術の発展。狩猟民族と農耕民族。モンゴロイドとアリア人社会。

「自然社会」→弥生「農業社会」→明治「工業社会」→令和「AI 社会」明治維新・太平洋戦争（大東亜戦争・植民地拡大）→ウクライナ戦争・米中対立（独裁主義と民主主義・東洋と西洋の対立）→AI 社会との共生

### (5) 司馬遼太郎の世界と22世紀への道筋

#### ①司馬遼太郎記念館訪問

司馬遼太郎の人生：外語大学モンゴル科、産経新聞、歴史学者、文学者。司馬さんの記念館を訪問し、20万の蔵書や雑木に囲まれた屋敷をみて、現在NHKの朝ドラで主人公を務める植物博士牧野富太郎氏を思い浮かべた40万種の植物標本を集め、図鑑への書き込みを行う牧野。書籍を集め、原稿の加筆訂正に精力を注いだ司馬。二人の天才オタクに拍手した。司馬さんの作品を見ながら、司馬さんの思いを感じた。

#### ②司馬遼太郎の目指したもの（幕末・明治維新・戦争・高度成長期・21世紀を通して国家としての自己確立・人間の優しさ）

歴史家の磯田道史氏が司馬さんの本を通して、20世紀までの期間での明治維新、日露・太平洋戦争による日本国家の誤り。日本人の特性を通して司馬は昭和を「鬼胎の時代」と定義し、21世紀に生きる日本人に道筋を与えたとしている。高度成長期のサラリーマンの教養主義、大河ドラマにおけるTVでの大衆化も日本人の司馬人気に拍車をかけた理由と思われる。

司馬史観、司馬遼太郎の歴史学者としての評価で「司馬史観」という言葉があり、歴史の事実や偏った見方（明るい明治と暗い昭和）や薩長寄り（尊王攘夷

思想家)に見えるとの批判である。日露戦争を独善的(防衛の為の)戦争観とする批判や、明治昭和の対比も単純すぎるとの批判もある。

「この国のかたち」で司馬遼太郎の「この国」への思いが書かれている。

一方で、「大衆小説家」として国民の意識の高揚に貢献して、サラリーマンの「教養としての歴史」と高い評価を受けた事も司馬氏への評価でもある。歴史学者の上田正昭氏は「丹念な資料の採集と深い読みが、史観と実感の中で、小説の形を借りて語られる」と歴史学者の上田正昭氏が語っている。

<一言主のコメント>

司馬史観は「人間史観」であり、歴史に忠実でない部分はあっても「人間への愛、自然への畏怖、いたわり、優しさ」を文学の中で書きたかったのかと思われる情熱がある。司馬遼太郎の書いた時代や人物の描写が、特徴であり、それが司馬史観。司馬史観の好き嫌いは個人的な判断だが、私は「人間智・人間愛」で司馬作品を読み直したい。司馬さんは自立を強調している。日本人は、中国との長い歴史、欧米文明との近世の新しい関係を通して日米、日中、国際協調の主体として、自立して「この国」の難局を打破して責任を持って世界平和に貢献しよう。

<一言主のコメント>

坂の上の雲も司馬本人が経験した戦争体験を大筋で伝えたかったと理解。国が誤った方向に行った時、国民が止めるか、国際機関が止められるか。プーチンロシアの戦争と核の脅しは絶対ダメで、ここが人類として生き残る正念場！今こそ世界全体での結束が必要です。

司馬は、戦争体験からこのような事を無くすべく戦争の歴史を書き、実態は覇権国家・独裁者の言うなりになっている現在の国際社会への苦言、解決への提言でもあるように考える。

(終わりに)

22世紀への道筋(コロナ・ウクライナ・核戦争・日本の未来)

歴史社会学者の福間良明氏は著書「司馬遼太郎の時代」で、司馬は二流・傍流で学校嫌い、そして軍隊に入り敗戦、二流紙への就職と紹介している。歴史や読書好きな司馬は、敗戦への幻滅から歴史小説に感心を持ち出した。司馬は「坂の上の雲」で、歴史登場人物の捉え方、人間愛で、日本人の心を掴み、一流の仲間入りを果たし『街道を行く』で我々の好奇心を擽った。

<一言主のコメント>

司馬さんの意志を組んで、日本を平和で良い国にする努力を続けてゆきたい



日の出は長く続かない。富国強兵や技術革新で世界の一流国になっても！政治家や国民が二流では世界の二流国になる！人口減少や少子高齢化の問題日本人の努力の後、[日の本の国に陽はまた昇る！] The sun also rises!

<一言主のコメント>

3年間にわたるコロナウイルスとの戦い、ウクライナ戦争は未だに終結の予想がつかず、核戦争の危機さえある。国際連合も機能不全に陥っている。気候変動、地球温暖化も待ったなしで、政治不信や生活への不安も大きくなっている。日本は危機の真っ只中にいる！

戦前と同じ道を歩き、同じ過ちをしないように！同じ過ちをさせないように！国民全体の「人文知」で最悪の状態に準備する緊急性を感じている。

<終わりに>

今回の近江・大和散策では、伊藤忠時代の友人と滋賀を回り、大学時代の友人と奈良を回った。また日本史や世界史に造詣の深い先輩・友人達からの貴重な情報、動機付けもいただいた。皆様に感謝申し上げます。

<未来への提言>

司馬作品は、現在・そして未来の「人文知と大衆」のありようを書いた。「読書を通じて歴史に触れ視野を広げる教養主義は続く」と福間氏を見る。司馬遼太郎の【作品】と考え方は、22世紀に向けて、これからの日本人にも「この国のかたち」や先行きを見通す「道標」になる事を私は期待する。

<一言主のコメント>

人生で大事なものは、「読書」と「旅」と「ロマン」かと思う。司馬と同時代を生きた松本清張の言葉「空想の翼で世界を駆け 現実の山野を往かん」人生はロマン探求の旅。私も「幾つもの道」を歩きました。グローバル人間で旅の好きな司馬さん有難う。「世界を駆ける伊藤忠♪」私にもグローバルで幸せな人生を与えてくれた伊藤忠さん有難う。

参考文献:

- 「街道をゆく1&24」 司馬遼太郎 朝日新聞社版  
「この国のかたち」 司馬遼太郎  
「古代史と東アジア」 上田正昭 角川書店  
「司馬遼太郎の時代」 福間良明、中央公論新社  
「司馬遼太郎で学ぶ日本史」 磯田道史、NHK 出版  
「神々の体系」 上山春平 中央新書、「古代史の深層」 辰巳出版  
「伊藤忠」 野地秩嘉、ダイヤモンド社  
「歴史の中の旅人たち」 岡田喜秋 玉川大学出版部  
「地形と海路から読み解く古代史の深層」 辰巳出版  
「万葉風土記」 大和編、偕成社  
「奈良県の歴史散歩」「滋賀県の歴史散歩」 山川出版

添付資料:近江散策 MAP 行程、大和散策 MAP 行程

写真1. 白鬚神社 写真2. メタセコイア並木 3. 海津桜並木長4, 5長浜  
長浜・琵琶湖 6. 彦根城 7. 東大寺大仏 8. 9三輪山 ・山の辺の道  
10.一言主神社(葛城山) 當麻寺(二上山) 12. 藤原京・天野香具山